

SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.01

2017.10

海に、還る

Take Free

海に、還る

文・森 休八郎



PHOTO:YUKIO SAWATO

「うーん、本能的なものかもしれないですね」

しばし遠くを見つめるような目をしてから、片山清宏は呟いた。

2011年に立ち上げ、2013年NPO法人となった「湘南ビジョン研究所」。片山はその設立者であり、今も理事長を務める。コンセプトは、湘南の海を守り、未来をつくる“まちづくりNPO”だ。

でも、なぜ湘南の「海」なのか。片山にそう問いかけ、返ってきた答えが「本能」——。片山の行動原理には、この「本能」が大きく作用している。

陸上少年からサーファーへ

片山は1975年生まれの、根っからの鵠沼育ちである。ところが意外にも、海とは縁遠かった。時折ビーチで砂遊びをする程度。幼稚園から始めた水泳、それにボーリスカウト活動が忙しかった。中学に進学すると、「楽そ.udだから」という理由で陸上部に入部した。

もっとも陸上は、「楽」というわけにはいかなかったようだ。顧

問の先生が代わり、一転して試合での勝利を、記録を目指すようになる。ガチで練習する日々が続いた。主に短距離と跳躍種目を得意とし、「1センチ、1秒という数字を追い求めて、クソマジメに死ぬほどトレーニングしていました」。

高校に進学しても、それは変わらなかった。高校3年の夏、南関東大会で3段跳びの7位に。惜しくもあと一步のところでインターハイ出場を逃した。

「やり切った感はありましたね。でも一方で、才能の限界を感じました。大学に進んでも陸上を続ける気持ちはありませんでした」

1994年に明治学院大学経済学部に入学したが、一種の燃え尽きたったのか、当初は、陸上に代わって打ち込めるべきものがなかなか見つからなかった。

「ちょうど5月の連休の頃でした。小学校の同級生が、鵠沼でサーフィンに誘ってくれたんです」

高校時代、兄の影響でウインドサーフィンをかじったことはあった。解放感や自由を味わい、純粹に楽しいと思ったが、それは勝つために苦しいトレーニングを続ける陸上という世界の、対極にあるものでしかなかったのかもしれない。

そして、大学生にして初めて持ったショートボード。果敢に飛

び込んだ海。

「実は、一発で立てたんですよ。余裕でした」

今度はサーフィンにのめり込んでいく。最初は土日だけだったのが、やがて週3、4回に。それでも足らず、毎日学校に行く前に海に入るようになつた。大学時代の4年間、それがすべてだった。その実力は、全日本学生サーフィン選手権大会で4位に入賞するほどの高いレベルにある。

市役所職員として

大学は、単位さえ取れればそれでいい。その程度の学生だった。

「学部選びに大した意味はなかったし、資格を取ることも考えてなかった。将来の目標もない、ダメ大学生でしたね」

それでも社会に出ねばならない時は来る。大学3年の秋、壁にぶつかった。サーフィンはずっと続けたい。だから藤沢から離れたくない。

一方で、こんな思いも湧いてきた。

「父は医者で、母から“お父さんのように人の役に立つ人になってほしい”と言われていたこともあったし、父が亡くなった後、女手ひとつで育ててくれたその母に恩返しをしたい、弱者のためになる仕事をしたい、という気持ちもあり、公けの仕事に关心を持つようになりました。で、公務員になろう、と」

だが、思い立つのが遅すぎた。わずか数ヶ月の勉強では足りず、最初は全敗。1年浪人して1999年、厚木市役所に入所する。

「最初の配属は、公園緑地課でした。ゴミの回収とか水回りの修繕とか、いわゆる現場仕事です。正直、つまらなかつた。最初の1年はサーフィン三昧でしたよ」

しかしこれではだめだ、と思い直す。サーフィンはしょせん趣味、個人のものだ。でも市役所の仕事は、どんなものであれ市民のためのものだ。このことに気がついてから、気持ちはがらりと変わった。年間300冊もの本を読み、地方自治や行政について勉強した。

そんな中、市役所内に、市長直轄の企画部門「21政策室」が新設されるという話を耳にする。片山はそのセクションに行きたい、と強く思ったが、府内公募は、40歳以上の管理職が対象だった。片山は当時24、5歳の若造でしかない。

「それでも、応募しました。何か熱意を伝えたいと、役所の問題点とその改善策を50枚ほどのレポートにまとめて提出もし

ました。それを人事が面白がってくれたのでしょうか、ペーペーのぼくを異動させてくれたんです」

この時から片山は、自らの道を自らで拓き始めた。

越えられない壁

異動して取り組んだのは、10年後の厚木市の将来像を検討する「総合計画」策定のプロジェクトだった。40人の市民公募ボランティアと、片山を含む30人の職員が1年かけて議論し、練り上げていったはずだった。

「まず国があり、県があり、市があり、その先に現場がある。行政とは、現場にある問題や課題を制度や法律で解決するものなんですが、市役所は結局は行政の末端でしかなく、現場とマッチしていないことについて、職員はいつも板挟みになるんです。この『総合計画』もそうでした」

規制や行政計画との整合性を図るために、練り上げたものを大きく修正せざるを得なかった。その最終案を市民ボランティアに提示したところ、70歳代の老婦人が涙ながらに訴えてきた。

「その女性が言うんです、“孫のために地域をよくしたいと思って議論してきたのに、なぜ私たちの意見を計画に取り入れてくれなかつたのですか？”“どうして市役所は融通が利かないの？なぜ自分たちの地域のこと自分たちで決められないの？”と。

ぼく自身もそのことを感じていただけに、こたえました」

そんな“役所への違和感”は、窓口業務に異動しても続いた。

「窓口にはいろんな人が相談に来ます。税金や保険料の支払いができず、減免を求める人。高額療養費の相談に来る人。生活保護の申請に来る人。でも、柔軟な対応ができないのが現実でした。そんな、相談に来る人ほど助けたいと思っているのに、ひとりも助けられない自分が、そこにはいました」

地方公務員としての閉塞感。立ちはだかる壁。煩悶する一方で、わずかながらの光も見出していた。21政策室に在籍したこと、行政を市全体のものとして見る目ができたこと。さらに神奈川県庁への出向で、政治の本質を垣間見たこと。

「県庁では、総合政策課に配属されました。ここで、知事の決断の場面にいくつも立ち会うことができました。県庁の官僚が案を持ってくる。それを知事が考え、決断する。決断することこそ政治だ、これなんだ、と思いました。ぼくが進むべきはこの方向なんだ、と」

当時の神奈川県知事は、松沢成文。片山は松沢に憧れた。11年務めた厚木市役所を辞め、松沢が学んだ松下政経塾に入塾したのは、2010年のことだった。



ぼくには海があるんだ

「松下政経塾は、3年の年限があります。最初の1年半は寮生活で詰め込み教育ですが、後半の1年半はフィールドを選んでの実践です」

片山の視線の先には、政治があった。入塾後は国会議員に憧れたこともあったが、自分がやるべきは市長だ、という強い思いがずっとあった。地域から日本を変えるんだ、藤沢から日本を変えるんだ、と。

だが何をどう変えるのかについて、なかなかはっきりとしたビジョンが見てこない。11年に及ぶ行政職の経験で、現場の大変さも自治体の置かれている立場も充分に実感したつもりだった。でもいざ、自分が本気になって取り組むべき課題を探そうとしても、すぐには見つからない。考える日々が続いた。「そのうち気づいたんです。自分には海があるじゃないか、と。他の街にはなくて、自分たちにあるのは海じゃないか、と」

学生時代からのめり込んでいったサーフィン。それは海の中で生き、海とともに楽しむことだった。

「海は1日として同じではありません。天気も、景色も日々変わっていく。サーフィンしていると、自然のエネルギーというか地球のエネルギーを感じられる。波のパワー、そして解放感。命はここから生まれてきたんだ、自分は生きてる、生かされているんだ」といつも感じていました」

だが視点を変えると、海が抱えるさまざまな問題も見えてくる。「たとえば海岸でビーチクリーン活動をする。そうするとわかってくるんです、同じ活動をしている人たちの間でも、エリアというか繩張り意識みたいなものがある、ということが。誰もが“海をきれいにしよう”という思いで活動しているのに、どうしてそんなゴチャゴチャしたしがらみが生まれるんだ。これってあり得ないことですよ。海には境界なんてないのに」

だったら、誰もが向かうことのできるひとつの目標が必要じゃないか。そんな時、知人から教えてもらったのが「ブルーフラッグ」だった。



湘南にブルーフラッグを!



ブルーフラッグとは、国際的な団体であるFEE(国際環境教育基金)が実施する、ビーチやマリーナを対象とした国際環境認証である。現在世界49カ国・4271カ所がその認証を取得しているが、2010年段階で、認証を受けた日本の、アジアの海岸はひとつもなかった。

「ブルーフラッグの認証は、地元自治体やビーチ、マリーナの管理・運営者などが中心となり、4つのカテゴリー(水質、環境教育と情報、環境管理、安全)で設定された33の基準を達成することが求められます。これは相当ハードルが高い。でもぼくは、これこそ湘南が目指すべき目標だ、と確信しました」

そこでまず片山は、ブルーフラッグ認証取得を目指すプラットフォームづくりから始めた。それが湘南ビジョン研究所である。2011年に任意団体として発足させ、2013年にNPO法人として立ち上げた。もはや「藤沢市」という地方自治体にこだわりはなかった。海に境界がないように、自分の活動にも境界をつくることをやめた。片山は葉山、逗子、鎌倉、藤沢、茅ヶ崎、平塚、寒川、大磯、二宮の9市町を「湘南」と定義し、ここを自分の舞台と決めたのだ。

活動がスタートした。地道な水質調査。月1回のビーチクリーン。海底清掃プロジェクト。15回にわたって開催した、多彩なパネリストたちによる「湘南の海を考えるミニフォーラム」。イベントや勉強会の場となった全11回の「BLUE FLAG CAFÉ」。子どもたちを中心とした、海の環境教育——。片山と湘南ビジョン研究所は、次々にアイデアを繰り出していく、地域のひとつや各種団体、行政をも巻き込んでいった。すべてが手探りだったが、手応えは少しずつ感じていた。ブルーフラッグ活動と並行して、2013年2月にはまちづくりビジョン「湘南都市構想2022」を策定し、提言もした。同年、松下政経塾を卒塾。2015年には慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程を修了し、片山個人のキャリアも積み重ねていった。

そして2016年4月。鎌倉市の由比ガ浜海水浴場が、日本そしてアジア初のブルーフラッグ認証を獲得したのである。自ら動き、ひとを動かし、地域を動かすことができた。この経験は片山に、行動原理のひとつを結実させてくれた。様々な果実をもたらしてくれた。

海に生かされる暮らし

「由比ガ浜のブルーフラッグ獲得だけで、活動が終わったわけではありません」

と、片山は言う。

「湘南の他のビーチでも獲得を目指すべく、湘南ビジョン研究所の柱のひとつとして、今も活動を続けています」

さらに、夢は広がる。

「ぼくは、最終的にはこの湘南を“海のある街”として価値あるものにしたい、と考えています。そのためにはまず、ブルーフラッグ獲得で実践したような、100年後もきれいな“海づくり”。湘南の未来をつくる“人づくり”。この2つが合わさって、海を活かした湘南らしい“まちづくり”をする。それがぼくの夢であり、湘南ビジョン研究所の目標です」

現在は株式会社サーフレジエンド社長室長、湘南ビジョン研究所理事長、慶應義塾大学SFC研究所上席所員の3足のワラジを履き、「行政」「企業」「非営利組織」の3つの垣根を超えて、社会問題の解決をめざしているという片山。その行動原理について、冒頭の問いか答えにもどる。なぜ湘南の「海」なのか、それは「本能」だ、という問答に——。

「よく、命は海で生まれ、海からやってきたと言いますよね。人間もそんな命のひとつ。だから海を活かすことは、海に生かされることだと思うんです。それが、“本能”的意味なんじゃないかな、と」

サーフィンによって覚醒した片山の「本能」は、共振性を持っている。周囲のひとびとの本能を搖さぶり、共感へ、行動へと駆り立てる。小さなゆらぎがうねりとなり波となって、ひとを、社会を動かしてゆく。それはまるで海のように、絶え間なく動いていくことだろう。

そう。片山は、常に、動いている。



ブルーフラッグ環境教育プログラム 「YUIGAHAMA BEACH YOGA DAY 2017」開催

8月19日(土)にNPO法人湘南ビジョン研究所が主催した環境教育イベント「YUIGAHAMA BEACH YOGA DAY 2017」について報告します。

イベント当日の朝は雨。

主催者として正午までには開催の判断をしなければなりません。テレビやスマートアンドで何度も気象予想をチェック。開催できるかヒヤヒヤでしたが、午後から天気が回復するとの予想を信じ開催決定!

午後から鎌倉の由比ガ浜海水浴場に向かい設営開始。予想が的中し快晴となりました。夕方からは涼しい海風も吹いて絶好のヨガ日和になりました。

アジア初の国際的な環境認証制度「BLUE FLAG」を由比ガ浜で取得して今年で2周年。今回のイベントはこれを記念して「環境」と「健康」をコンセプトに開催しました。

参加者全員でまずはビーチクリーン。海岸の環境問題についてレクチャーさせていただいた後、みんなでヨガを行う会場周辺のビーチをきれいにしました。

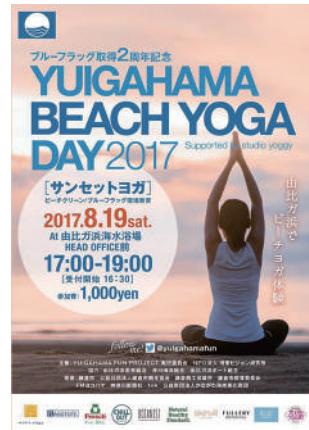
その後、いよいよ、夕日を見ながら海に向かってのビーチヨガ! 講師のノリ先生の絶妙なご指導で、心も体も海と一体になって最高の時間を過ごせました!

サーフィンのトレーニングの一環として多くのプロサーファーが取り入れているヨガ。私もジェリー・ロペスになりきって挑戦してみましたが、体があまりにも硬く無様な格好に……(笑)

でも、波の音、海から吹く風、沈みゆく夕日……。自然のエネルギーを全身で感じながらのビーチヨガは本当に気持ちよかったです!

撤収作業中に雷雨に見舞われましたが、土砂降りの中でもスタッフ一同笑顔で解散。これもまた夏の良い思い出になりました!

お越しくださった参加者のみなさま、講師のノリ先生、協賛企業各社、ボランティアスタッフのみなさん、本当にありがとうございました! (文・片山 清宏)



ブルーフラッグ環境教育プログラム 「みんなでビーチコーミング～みつけよう海の宝物～」に参加

9月9日(土)に鎌倉市青少年指導員連絡協議会鎌倉地区が主催したビーチコーミングについて報告します。



(右)山田海人先生

鎌倉には古都鎌倉の海があり、ビーチコーミングに最適な海辺です。

海岸などに打ち上げられた漂着物を拾ったり、集めたり、観察したりすることをビーチコーミングと言いますが、嫌われる海岸ゴミを標本にしたり装飾にしたりして楽しむっていうのは、逆転の発想ですね！

当日は、青少年指導員の皆さんと子どもたち30人以上が参加。NPO法人湘南ビジョン研究所は協力団体としてお手伝いさせていただきました。

波も穏やかで、晴天の中、「海の宝物」探しを楽しみました。

参加した子どもたちからは、「カニを捕まえられて楽しかった。意外にゴミが少なくてキレイな海だった」「海辺にあるゴミの中にも宝物があると知った。ビーチコーミングまたやりたい」「たくさんの種類の貝殻を拾った。家に帰ってアクセサリーをつくりたい」「山田先生から700年前の『馬の歯』だと説明を受けたときは本当にびっくりした！」などの声がたくさんありました。

ビーチコーミングすることで、海辺の生き物や昔の鎌倉の暮らしを知ることができますね。ビーチコーミングの魅力はその土地の歴史も学べることだと実感しました。

青少年指導員の皆さん、山田先生、ありがとうございました！（文・片山 清宏）



Information

湘南大学プレ講座 「秋の湘南海岸・浜歩き」

～未来に残したい湘南海岸を考える～

「かながわ海岸150キロビーチクリーン駅伝」(主催:湘南クリーンエイド俱楽部)とコラボして、藤沢市・辻堂正面から茅ヶ崎市・汐見台までの約1キロをくびーチクリーン＆ビーチコーミングします。希望者は、拾い集めた漂着物でく写真たて>も作れます(要事前申し込み)。小さなお子様でも参加可能です。

秋のなぎさには渡り鳥のミュビシギが、砂浜にはハマニガナ、海岸林にはモズやジョウビタキがいるかも。一緒に観察しましょう!

- ・主催:湘南ビジョン研究所
- ・日時:11月3日(金)9時
- ・場所:辻堂海岸正面集合(JR辻堂駅南口から江ノ電バス「鵠沼車庫」行で「辻堂海浜公園」下車徒歩3分)
- ・参加費:300円(保険代含む)
- ・写真たて制作費:200円
- ・問い合わせ・お申し込み:
h.koba1950@gmail.com(小林)まで (文・小林 秀光)



湘南大学プレ講座「おしゃべり考房」

映画と本とパンの店「シネコヤ」ととのコラボ企画です。
映画を題材に「これからの生き方」についてみんなで話す。
話しているうちに気づきと出会いが生まれる。
そんな時間と空間へお招きします。

11/11(土)15:30~17:00映画「ブランカとギター弾き」で話す
11/18(土)17:30~19:00映画「鏡は嘘をつかない」で話す
受講料:各3,500円(シネコヤ1日利用券、ワンドリンク込み)

- ・場所:シネコヤ
神奈川県藤沢市鵠沼海岸3-4-6(小田急江ノ島線鵠沼海岸駅から徒歩5分)
- ・お申し込み:詳細は湘南ビジョン研究所のホームページをご覧ください。
<http://shonan-vision.org/>
- ・問い合わせ:湘南ビジョン研究所事務局 svi.jimu@gmail.com (文・中村 容)

11.03
Fri

Let's have fun!
配布・設置していただける
場所を募集しています

葉山deクルージング!

日本ヨット発祥の地・葉山から、2020年東京五輪セーリング競技のレース会場となる海面をクルージングしませんか?

海をたっぷり楽しんだ後は、元アメリカズカップニッポンチャレンジ・クルーでプロセーラーの伊藤徳雄氏のお話をうかがいます。交流会もありますよ! お子さまも大歓迎!

- ・主催:湘南ビジョン研究所
- ・日時:11月3日(金)15時~19時
- ・場所:葉山マリーナ2階待合所(京急新逗子駅南口またはJR逗子駅東口からバス「葉山一色(海岸廻り)」行で「葉山マリーナ」下車)
- ・参加:大人4,000円/小中学生2,500円(クルージング、ドリンク、軽食含む)
- ・問い合わせ:info@shonan-vision.orgまで
- ・お申し込み:<http://peatix.com/event/311520>

11.03
Fri

(文・大塚 靖雄)



11.11
Sat

11.18
Sat



PUBLISHER:片山清宏
EDITOR IN CHIEF:森休八郎
ART DIRECTOR:大戸千尋
EDITORIAL STAFF:片山久美 入江健二 富山涉
大塚靖雄 関水裕子
COVER PHOTO:沢登ユキオ

<http://shonan-vision.org/>
 @shonanvision
 info@shonan-vision.org